

汲古一心

— 講演より —
『書はどういう芸術か』(一)
中村素堂

一 芸術とは

私は書道家なので、心の中で書もまたひとつの芸術であるとは思っております。たとえば自分が書道という学門を学校で教える時に、音楽・絵画と同じく、これは芸術科の科目なのです。そのため、なぜ書道が芸術ですかと問う人もあり得るわけです。こういうわれて一応の答弁ができるか。私は長年の間、そのことを常にいうのですよ。高校・中学の教員に限らず、いやしくも書道を教える立場にあつて、書道は芸術であるのかということ、一応理論的に説明できないようなことならば、書道は理論的に薄弱だといわれる。だから外の科目の人に書道は軽んぜられるのだ。書道はなぜ芸術であるか。一体芸術というのは何なのかということくらい、ひと通りの見識をもつていなければいかんということです。そういうと大変偉そうですがお前はよく知っているのだなといわれると、はなはだ困るのですが。だからいくら読んでいないとそういえないので、多少は自分も読みかつ考える。しかもそれは我田引水のために読んでいます。書道を非常に有利に展開して、書道の位置を高らしめるために読んだ芸術論なので、実に都合よく出来上がつていて困る。絵かきなどを弁護するためにできている芸術論じゃない。それをぶちまきろろうというのですから、怪しげなんですけれども、ただはつきりひとついえることは、芸術とは何だということに対して、アルス・アート・クンストなど古い欧州語、東洋の六芸など、いろいろの言葉が出来る以来でも、定論というものはひとつもないということです。芸術論というものは、立派なものが実に沢山ある。一流の画家、一流の芸術評論家、外国・日本にわたり大変な数です。まあ芸術評論だけを専門にやっていて、大学で四年くらいやつても芸術論は学べない。美学という学問があつて、国立大学なら大抵あります。美学だけを

四年間専攻して、大学院までゆき、ドクターコースに行つても、美学の本は全部読みきれない。美学とか芸術とかいうものは、それを理論的な学問として追求しているだけで、何十年という月日を費してしまふわけですが、どうも芸術とは何だということに対して、確たる定論がないのではないかと思う。まあひと口に芸術術といいますが、まず限定してかからねば、定義づけなどは出来ないのではないでしょう。

最近、芸術という言葉が非常に濫用されて、何でもかんでも芸術みたいにいいますが、果たしてそうでしょうか。料理のうまい人、それは芸術家だ。料理は立派な芸術なんだ。お寿司屋さんの優れたのは芸術家だ、といった具合です。芸術ということは非常に広く考えたり、あるいは狭く考えたりと、いろいろ学者によつて違い、定論がないことのひとつの原因は文化の程度による違いだとも思いますが。たとえば古典文化を維持している国、ベルシャ・英国・フランスといった国は、古典文化の実証的なものが沢山現存して、高度なものを持つています。そうじゃなくて、かなり未開な国がある、といった違いです。また時代によつても違う。日本など時代によつて芸術の定義が違います。外国でも多少そうですが。国民のものの見方、習慣によつてもまた違う。ああいうものは芸術じゃないといつて、きびしく規定しているところ、随分広範囲のものを芸術として取り上げている国もある。そこで私は、自分がやっている書道を意義づけるために、個人とか社会とかを問わず、人間の生活を美しくするために、有形・無形の美をつくるための技術、学問を包括して芸術というのではないかと考えているんです。やかましくいえば、美術と芸術とは別に考えねばいけないということもあつて、今でも美術評論家の中には、芸術論をやらないう人がいるそうです。

(つづく)